



TITLE:

經濟循環期論(一)

AUTHOR(S):

財部, 靜治

CITATION:

財部, 靜治. 經濟循環期論(一). 經濟論叢 1919, 8(2): 147-158

ISSUE DATE:

1919-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127493>

RIGHT:

經濟論叢

第八卷 第二號

(通卷第四十四號)

大正八年二月發行

論

說

經濟循環期論 (二)

財 部 靜 治

望月の缺けたる事もなしと思ひつゝ、一身の榮華何時迄續き得へきかを考へず、天運環りて榮枯恒なきを忘るゝか如き觀想は、我邦にありては異例に屬す、寧ろ普通なる觀想によるに、満月を看ても「三日月ノ頃ヨリ待チシ今宵哉」と觀し、「スコシキラ足レリトモ知レ満チヌレハ、月モ程ナク十六夜の空」と誠むるか如きその一班たり、すこしきを足れりとも知るの主旨を掲げて、經濟の原道となす事も、評論の一大題目となし得へしと雖も、今専ら問はんと欲するは、月の盈虧を盈虧の變として觀したる點にあり、宜なる哉、鐘を撞きて標準時を民衆に報するにも、日々今の正午及夜半に當る午の刻及子の刻を起點として、九つを打ち、その後毎二時間を経るに従ひ八つ七つ六つとその數を一つつゝ減して打つの習慣を養ひ、これ「陽中ノ陰、陰中ノ陽トイフヨリ

起ル也、日中午ノ刻ヨリハヤソノ夜ノ陰ノ兆アリ、コレ陽中ノ陰ナリ」「夜半子ノ刻ヨリ明ケノ日ノ陽ノ兆アリ、是陰中ノ陽ナリ」二つ宛遞減して撞く事により「畢竟光陰ノ過ユクヲ觀セシムル也」との、解釋をも生むに至れるや(菊岡治源著近代世事談中時の鐘參照)之を經濟上の觀想に付きて察するも亦、經驗上經濟事情の規則正しき變化を、指摘言明せんとせるものは渺からず、數多き俚諺の中より一例のみを擧ぐることにせんに、飢饉針魚サユリに世の中鰯といへる飛驒の諺あり、その適否は兎も角とし、凶年には針魚多く豊年には鰯多きを言明せるものたり、著書中の立言としても亦假令は、明治三十五年の奥羽飢饉の後を承け、地方政治に多年の經驗を積める初瀬川健増氏、著作に係る備荒錄緒言中の一節によるに、年の豊凶なるは尙日月の盈虧あるか如く、三十年に小凶ありて、五十年の間には必ず大凶ありとは、古人の確言也と言へり、現今日常普通に注目する、觀想によるも亦假令は、大正五年十二月十四日の大阪朝日新聞記事中「米界ノ大變動ハ八年目、株界ノ大瓦落ハ十年目ト、周期率カ極ツテキルカ、明治四十年一月十九日ニ大株七百七十四圓九十錢ノモノカ日曜ヲ起シテ二十一日ニハ、百五十五圓と落込」ンタノハ「人ノ記憶ニ明カナル悲風慘澹ノ一幕テアツタソレカラ殆ント滿十年ニナラントスル今日ノ大變動ハ、全ク周期率ニアテ嵌マ」れりと一大論斷を下しつゝ、その原因に言及し「短イ歴史ト少イ人間ノ根氣テハ容易ニ歸納」するを得すと附言したり、看る可し、經濟の周期又は循環期に關する研究は、一學究の閑事業に終るべきものに非るを。

之を西洋につき察するに、右に擧げしか如き常例の着想と、之か歸納的研究とは、夙に學者に

よりて遂けられたり、我か徳川時代に於ける堂島一米商人と想像せらるゝ大玄子の興味ある著書「商家秘録」中の一節に曰く、「汐ノ満干ハ天地ノ呼吸ニシテ、人ノ生死雨ノ降晴ミナ是ニヨラズトイフコトナシ、サレハ相場ハ人氣ヲモツテ、自然ノ高下スル物ナレハ、天地ノ理ニシタカフ道理アリ、大高下ニテ一方ハ片付時ハ汐満ルトキカ、干ル時ニ上リモ下リモ留」ると、假りに相場の變動か、天地の理に従ふへしとするも、开はその變動か潮の干満に符節を合すへしと、するの意に解し得へきや疑なき能はずと雖も、潮の干満か種々の事由に左右せられ、大體に二十四時間、二十四時間五十分、二十九日、一年其の他の期間を挿みて循環すへきは否定すへからざる事實なり、かくて又此事實に比擬を求め、夙に一八五七年産業界にありても亦、海潮同様殆んど規則正しき潮あるの事實を指摘せる英人 William Langton あり、²⁾その外一般に其の經濟上の變動か、略同じ期間を挿みて繰返さるゝの事實を觀て、その現象に定期回歸性 Periodicity あり、定期回歸律 Periodic law ありと唱へ、諸學者による諸研究を見たるのみならず、商況盛衰繁閑の波動は、各種の産業に於て各別に窺はることなく、諸業順逆の時を同しうするの傾向あるを見、産業界に同周期 Synchronism ありと觀せし人もあり。³⁾夫れ然り、果して經濟上の諸事實に付、定期航路の往復航か一定の期日を挿みて繰返さるゝか如く規則正しきものありとするを得へきや、又その事實ありとせば如何に之を解釋すへきものたるか、以下諸學者研究の糟粕を嘗めつゝ、之か研究の端緒に就かんと欲す。

二

1) cf. Bowley, Elements of Statistics, 2. ed. '02. p. 178

2) cf. Jevons, Primer of Political Economy, p. 115.

3) cf. Chapman, Outlines of Political Economy, '11. p. 254.

一現象の定期回歸性に就き、先づ注意すべきは、その回歸的なること確かめられたりとするも必ずしも之を惹起すべき事由を以て、痙攣的たり、前後の關係に對する繼續性を缺くと、考ふべからざる事なり、夫れ世には平穩無事の間に、絶えず作用しつゝある力たるも、一時點に達すれば一時に爆發してその平和を紊し、かくて定期にのみ、その力に本づく諸相中の特定面を、露顯せしむべきものあり、その最も簡單なる一例は、之を間歇泉に求むべきも、その外又吾人は人の筋肉及神經の働か、その性質上間歇的な事實を知る、素より作家の間にも、才氣煥發し、時を選ばず一氣呵成の文章を作すに困まざる人ある一面には、間歇的にのみ思想を湧かしめ又一旦之を湧かしめては、克く人の企及し得ざる着想をなすの徒あるか如く、氣質の相違に基づく區別は認むるの要ありとしても、右の事實あるかために、人人個別の身的及智能的行動一切に、定期回歸性あるは、その一基本特色とすべきに似たり、されど又此事實を認めたればとて、之を本として一切の社會現象定期回歸的たるべく、加之又間歇的、痙攣的たるべしとの結論を、必然下し得べしとするを得ず、一社會の組成者は、絶えず新陳代謝し、諸社會活動は絶えず一部交替を伴ふべき一群の人により遂けらるべきを以てなり、從ひて個人に關する研究上、その身體又は精神の疲勞には、一論旨を立て得べしとするも、別に立證すべき材料あるに非る限り、その論旨を諸種の社會活動に類推適用するを得ず、假令は夜業を行へる一工場の仕事につきて見るに、その晝間勤務の職工は、一日の勞働により疲勞して、夜業職工と交替すとするも、その事業は間斷なく續けらるゝを見て、之を推知すべきなり、看るべし、個人の活動は痙攣的たりたりとするも、社

會現象は必ずしも之かために、同じく瘡癰的たるへしとするを得ず、その瘡癰的なるの事實を擧げて、現象回歸を説明し得ざるを。

三

永代節用無盡藏の説明によるに「秋ハ赤キノ略ナリ、萬物熟シ草木紅葉シ、果^{クダモノ}テリ、稻モアカラミテ、萬民食ニ飽^{アキ}ナリ」とせり元來凋落を意味せる一語」に、秋の一義を伴はしむる英語の用例をも、偲はしむると共に、四季は各それ自體の一特色を、備ふる事を想はすんはあらず、實に和漢にありては古くより、易^二有太極^一、是^レ生^二兩儀^一、兩儀生^二四象^一とし、四季も亦陰陽兩儀の配合消長により區別せられ、生、長、收、藏の四氣、之に配せらるゝと觀せられたり、その觀想の適否は兎も角とし、四季の變により、生死、婚姻、離婚、犯罪、自殺等、人身上の出來事に付、計數上特殊の變化を呈することは、可なり鮮明に窺はるゝのみならず、諸經濟現象に付四季循環に伴ふ、一定期回期あるは、夙に學者により注目研究せらるゝ所となり、又その間歇的たる性質は、前項の論旨と反對に、個人の間歇的活動期せずして一致し、その果を社會に窺はしむと觀するは普通に見る所なり、春は發するなり、蠢也、計畫の季節なり、夏はその計畫實施のために忙しき季節なり、秋は決濟又清算の時なり、冬は冷^{ヒユ}なり、活躍の氣收藏せられ、人は經濟上眼前に必要を告ぐへき、義務のみを果たすに逐はるとするか如きことを、事實特に計數により確かめんとせる試みは、その例に乏しからず、此點に關する Jevons の研究は、後に尙紹介すべき所なるか、茲にはかゝる回歸現象か、季節の變に支配さるゝこと多き、農業地域及農業時代には特に鮮明に

窺はるべきこと、Levonsは十月十一月次いて四月五月を以て、金融引締るの月と斷したるも、倫敦金融市場と自ら其の趣を異にせる、本邦金融界にありては、自ら其の回歸の波を異にすべく、特に經濟的慣習上一年二回の節季を、重んずるか如き農村住民に富める本邦にありては、之が影響としての特殊回歸あるべきは、察するに難からざることを、附言するに止む、吾人は銀行特に諸地方に支店を置ける銀行の、金利變動を材料とし、這般常例を究明せんとするの機會に、接するを希ふ者なるも、かの勸業債券の賣出し上、舊曆の師走は地方金融引締るの月たるを鑑み、由來曾て新曆一月に發賣せることなかりしに、戰時利得は地方民をも濕はし、又奢侈の風は農民にも及はんとするの事實を察し、最近第七十一回の募債に際し、初めて本年一月を選へるは、右の消息を裏書することを、想はすんは非ず。

四

前記商家秘録中の一節には「申包胥カ詞ニモ、人定ツテ天ニ勝、天定ツテ人ニ勝ツトイヘリ、天ホド尊ク遠クテ、人間ノ自由ニナラヌ筈ノ物ナレ共、夫サヘ人ノ心大決定スレハ、一旦ハ天理ニモ勝ツ事アリ」「此人氣トイフ物、サラハ拵ヘテソフシャウトイフテ、出來ル物ニアラス、自然ト人ノ心カ揃フヲ、人氣トイフ也」と説き、米の需給による相場其自然調節も、時には人氣によりて紊さるべきことを指摘したり、こは恰も亦社會心理に特殊の特色あり、社會上に於ける定期回歸現象の中には、此特色を微證すべきものありとする論旨の一端を、言明せるものとなし得へし、假令は米國數都市の市政改革運動は、痙攣的なるのみならず、規則正しき回歸性を示すこと注目せら

れたり、試みに此事實を説明すべき學説を尋ねんか、惟ふに謂ひ得へし、市政上絶えず働ける方は、市政に關係せる人々の利己にあり、その利己心の發露一定の度迄續けられんか、茲に市民の忍耐心は破られ、衆心一和市政に於ける一危機の、逼迫を促すものなりと、されど又右改革の精神は利己的動機の如く、耐久力を有せざるを以て、間もなく終熄し、又新循環期を始むと謂ひ得へし。

五

米大陸に於ける西漸土着の運動は又連續的たらず、新地域に移り行く民衆の波動上、一起一伏を繰返すことにより遂げられたり、夙に此事實を看取せる教授 Tausig は言へり、「北米合衆國に於ける土着、新境開拓の過程は、決して規則正しき徐行を以て、進行することなかりき、寧ろ一時的にその移動の繁忙を告げたる後、沈靜、反動の時期を以て之を承け、その間移住は一時殆んど全く絶ゆ、かくて十年否その前後に近き年月を挿める後、民衆は寧ろ急き過ぎて西漸移住し、かくて又氣休め息繼の時を續けて、新繁忙期の來るを待つ」と。一般に諸種の社會活動にありては一定の刺激を加へられ、かくてそれ等刺激に對する社會的の一大反動を引起す迄に、一定の期間經過を挿むこと必要なるに似たり、合衆國政界に付觀する者は、その大統領選舉期の間に挿まる、期間經過中に、公衆の思想を維新し、その結果虞らくはその期間の一函數視すべき、是等政治的競争に興味を惹くこと強きに至るとなす。而して經濟上の危機は恰も亦此意味に於て、一の間歇的現象視すべきに似たり。

六

諸學者は更に一步を進め、經濟上の危機たる恐慌に、一定期回歸律あるを唱へたり、かくて定期回歸の觀念は、大多數恐慌説に融合せらるゝこと著しく、その承認は全く普通なり、周期又は循環期 Cycle とはかゝる定期回歸型を呼ぶに用ひらるゝ一語なり、而して金融極度の引締を呈する際は、一般商界、事業界特に雇傭關係上變調を呈するの時なるを以て、現今は寧ろ一般に Economic cycle 又は Business cycle とふ語を、使用すること普通なりと雖も、周期の語を用ひ初めし當時は信用の文字に結びつけて使用されしに似たり、兎に角同語使用の嚆矢は John Mills か一八六七年マンチエスター統計協會報告書中 Credit cycles and the Origin of Commercial Panics とふ一文を發表せるに存するものゝ如し、氏は恐慌の病理を論し、數年の經過中取引高を増減せしむべき、玄妙なる諸力あることを説ける後、定期回歸性につきて曰く、「約十年毎に突然金融市場に、大需用増加起り、之に次いて一大激變及信用の一时的滅却あるの事實は、疑ふべくもあらず、兎に角商業恐慌に定期回歸性あるは、一の事實なり、諸商業恐慌間に挿まるゝ旬年は、一現狀の下信用の進展上窺はるゝ常周期 Normal cycles なり、是等旬年は各その經過中、商業信用に付一生涯の一循環を遂ぐ、その幼少期より成熟期に成長し、病的老年を経、終に銷衰して死す」と。

七

産業周期に關する一學説を編まんとする試みは、夙に第十八世紀末にその端緒を發したり、特に一八二五年の恐慌に際し、商業の波瀾廣く諸地方に行亘るや、その原因に關し、意見の相違は

4) cf. G. H. Pownall, Art. Crises in Palgrave's Dictionary

間もなく起れり、その後にはける諸恐慌により新材料を齎らし、新論客を増せるや、その相違は愈甚しきに至れり、而して極めて複雑なる恐慌現象を、説明せんとせる初期の試みか、粗雑又皮相的なりしは避くべきに非りき、されどその問題は多數人の注意を惹けるより、同問題取扱ひ方の性質は急に改良されたり、素より回歸し來る各恐慌は、相次いて不當に考へられし新説を生みたりと雖も、その間他の學者は絶えずその先驅者の所説を、採用又改善したり、されど亦かゝる彫琢の過程上、初期に現はれたる意見相違の餘波、一掃さるゝに至らざりき、寧ろその代りに諸異説は派を立て、別異の數學說系統を引き、又その何れも幾多の大同小異説を生み、増し行ける著書により代表さるゝに至れり、今先づ諸學說の梗概を瞥見することゝせんか。

第一の見解として擧ぐべきは、恐慌を以て革命的發明の出現、舊商路を變せしむべき新交通方便の發達、戰爭、關稅率改正、本位貨幣の變動、凶作、一大企業の思ひ掛けざる破産、流行の變化等の如き、一大事變に基つく非常現象視するにあり、現に恐慌の定期回歸性を、始めて注目したりとすへき William Petty 次いで Bagehot は、その定期回歸を以て、收獲動搖により金融市場に及ぼす影響に、基つくものなりとせり。かゝる説明は諸經濟活動の平準狀態か、精微なる組織を探るに至れるため、その平準を紊すへきは、性質全く相異せる一事變、不運の景氣 *Untoward conjunctures* にありとするの假説より進み、各恐慌に付それ自體の特別なる原因として、差當りその恐慌に先たてる、數ヶ年内に求むるの要あるべきものを、論斷指摘せんとす。

形式的簡明上之に次くべき學說型は、恐慌を以て通貨膨脹 *Inflation* に歸する説にあり、鑄造貨幣、不換紙幣、兌換券等の増加は、諸物價の騰貴を促し、その騰貴は諸業を刺戟して之を活躍せ

しめ、その結果極端に趨りて、無謀の放資と熱狂的投機とに陥らしめ、引いて信用の破綻并に廣く行亘るべき破産を惹起すとなす。

第三に恐慌は屢生産過多 Over-production (Robert Owen, Malthus, Sismondi) 又は消費過多 Under-consumption に歸せらる、人の欲望は必ずしも、充分に充たさるゝを得さるかために、消費多きを得ずして、貨物の供給過多ありと、なし得べきを以て、右二語は畢竟同し事を言ひ表はすへき、二つの仕方なりと謂ひ得へし、その説によるに、輓近機械の功程偉大となり、土地の改良行はるゝ結果として、急激なる生産増進を促し、社會の生産力はその消費力に超過すへし、從ひて一般生産過多 General Gluts の定期回歸あるへしと論ず、乃ち之かために過潤澤は不足を生ずとの、非に似て是なる一事態を生じ、雇主はその増大せる貨物産額を、損なき代價にて捌き得さるかために、餘儀なくその工場を鎖ち、その労働者を解雇すへし、そは雇主にとりては一救治策たるへきも、之かために消費貨物に對する、社會の購買力を減することにより、右の病症を一層助長すへしと説く。輓近經濟の發達にありては、餘剰生産により恐慌を促すよりも、需用の變により之を見ることは頻繁なり、又貨物に對する欲望に不足を告げさるも、その欲望の集まりは必ずしも購買力備はれる需用たらず、從ひて生産過多の意を解し、生産力の増進又は購買力ある需用減少により、惹起されたる需用供給の一时的不釣合と、なすを得へきも、右の學說上必ずしも之を問はず。

右一般生産過多説は、經濟學古典派には一異端説たりき、乃ち同派の學者(殊に J. B. Say)によるに一種貨物の供給は、必然他の貨物に對する需用たるべきを揚言し、一般生産過多の可能を

根氣能く否認し、唯特殊産業に於ける生産過剰は、販路停塞によりて起り得へきも、それは必然他の種の産業に於ける、生産過剰の條件となるへし、従ひて自由貿易主義の交易形態は、恐慌に對する最良の救済方便たりとなす。されど此學說に假定さるゝか如き、生産及需用の密接なる交互關係も、實際上には何處にも存せず、各生産は必ずしも購買力ある需用を發見することなし。されど又同派の學者中には、生産上の不調節起り得へきことを認めつつ、恐慌に關するその學說上かゝる不調節か、引合はさる放資に資本を卸すかために、引起さるべきことを示すに勉めし者少からず、而も亦資本のかゝる寝かし方は、利潤最小化の傾向に本づく、一結果たりとは屢主張せられたり（特に J. S. Mill）乃ち此傾向に促されて、世上普通の利潤率を不慣れの低位に引下げ、ために機敏ならざる資本家は不満を懷き、不當に計畫されたる方策を探るに至り、その結果販路全く發見されざるへき貨物の生産、事業の失敗信認の缺如を見るに至る、略言すれば、諸種の産業に及ぼさるへき一恐慌起るとし、又その恐慌は定期に回歸すとなす。

他の一群の經濟學者、特にその著明代表者を Schäffle, Wagner におけるは、不調整の生産を以て、恐慌の原因と認めつつ、之か説明を輒近經濟組織の複雑、大經營産業態の建設に求めたり、工業家は將來の變化を豫想し得さる一市場のため、數ヶ月前に貨物生産に當ることを餘儀なくせらるゝのみならず、放資者はその用不用不定なる企業に對し、數ヶ年以前に放資することを、餘儀なくせらる、かくて供給と需用とを、過不及なく調和せしむることは、出來得へきにあらず、此點に付陷あるへき過誤は、避け兼ねる判斷見越の過誤に、歸すへきに非ずして、資本々位生産の無謀に歸すへしとなす。

されど恐慌か資本本位主義の、一慢性病たるを立證せんとせる、最も力強き試みは、Rodbertus, Marx, F. Engels その他社會主義の祖述者により、立てられたる所説にあり、彼等は恐慌を以て、一面には現生産に於ける個人主義的性質の所産なりとし、一面には富の分配不正による所産なりと考ふ、夫れ社會主義者の論争上、普通に眼目とする所は、労働者かその産物の實價格以下たるへき賃銀を受くとするにあり、かくて一面現生産組織によれる生産物は激増するも、主として多數賃傭労働者の資力に待つへき、消費貨物の需用は、右産額の増進とその歩調を合はすを得ず。(乃ち一の消費過少説なり)而してその間資本家企業家はその通有貯蓄を、新企業に放下しつつあり、その新産業は市場への貨物供給上、その分け前を即時に増さしめ初むへし、此過程は累積的に進み、遂に利を収めて貨物を賣るの不能明白となり、かくて一恐慌を初むるの時至る、而してその恐慌は現産業組織か、根本的に改められざる間は、定期に回歸さるへしと信す。素より所得の分配公平とならば、賃銀を騰貴せしむることにより、恐慌の影響を大に緩和せしむへきも、社會主義者の主張するか如く、全然之を排斥し得ることなかるへし、蓋し販路停塞の主因は、需用の洞察と、豫期さるゝ生産の見込、并に之に相應せる施設とを遂ぐるの不能に求むべきを以てなり、信用經濟と機械制及大經營の發達とは、現今大多數産業に於て、短時日の間に生産を需用以上に擴大せしめ、何れにしても消費者の現支拂能力以上に上るを得せしむ、されど右の支拂能力は、諸産業に亘り一樣に生産との釣合を保たしむるを得ず、利潤分配の方法により、純益との釣合を保たしめ得へきも、その能力を總收益と釣合はしむるを得ず、而して需給の不釣合は、依然として代價崩落、引いて又幾多企業の労働者解雇、沈滞、破産を促すへきも、社會主義者必すしも、之を問はざるなり。